



オーディオの
プログラム
ソースで、アナログ
ディスク再生ほど興
が深く、しかも愉し
いものはない!! 私
は最新のデジタルオ
ーディオも積極的に
追求しているつもり
だが、理屈抜きで惹
かれる音はアナログ
ディスクのほうだ。
かつてデジタルオー
ディオの音に打ちの
められて何年かアナ
ログディスク再生か
ら遠ざかったことの

ある私は、いま心からアナログディス
ク再生を愛してやまないオーディオフ
ァイルである。ノスタルジックには
なく、現代のかつ正攻法的なアプロ
ーチで、私はアナログディスクの美音を
極めていきたい。

最初に、私がアナログディスク再生
から遠ざかった経緯を話しておこう。
コンパクトディスク(CD)が世に登場
したのは1982年。その翌年あたり
に私は自分のオーディオシステムにC
Dプレーヤーという新しいソースコン
ポーネットを導入した。CDのメリハ
リがあつてダイナミックな音に少な
からぬ驚きを抱いた私であつたが、その
時点ではまだアナログディスク再生の
ほうが魅力的な音を聴かせていた。そ

いつも感心するの
が広角レンズの演
出による広大なス
ペース感。実際は
江戸間8畳程度の
オーディオルーム
である。その奥に
変形6畳の部屋が
続いており、原稿
を書くデスクとサ
ブシステムが置か
れている。スピー
カーシステムはク
レールのLAT1000
であり、前作のL
AT1と入れ替えて
から3年ほど過ぎ
ただろうか。振動
板にアルミ合金を
採用した低域(8
インチ×3)とチ
タニウム振動板
による中域(5.2
5インチ×2)、そ
してフェイズブラ
グ装備の高域(1
インチ径リングド
ーム型)を組み合
せたLAT1000は、
常に刺激的で新
鮮な音楽を奏で
てくれる。パワ
ーアンプはエア
ーのMX-Rであ
る。かなりの大
音量再生を除く
と駆動力の不満
もなく、緻密で
躍動感に優れた
多彩な表情が魅
力。(三浦孝仁)



アナログ 再生の愉悅



れでも何度かCDプレーヤーを買い替えて私がデジタルオーディオの音を追いかけて続けたのは、デジタルレコーディングの作品が増えてきて新譜のリリース量がCDのほうにシフトしてきたからだった。1980年代に入ってからアナログディスクも新録音がすっかりデジタルレコーディングになり、デジタル録音だったら最初からCDを入手したほうがいいと思うようになってきた。

1980年代が終りかけた頃に登場

三浦孝仁

したワディア2000が、私のオーディオ人生を大きく変えた。AT&T製のDSPで独自のデジタルフィルター・アルゴリズムを構築したワディア2000の凄烈で説得力に満ちた音に感服した私は、どうしてもワディア2000を自分のものにしなうと考へた。そのときに使っていたアナログプレーヤーは、マイクログ精機のSZ・1Tである。同社の最高級機の一つで、ステルス製の重量級プラーターを空気の力で浮かし、しかも盤を吸着してプ

ラッターに密着させるという完璧主義を具現化した超弩級モデルだった。専用のSFベルトを使って駆動するベルトドライブ方式で、駆動用のACシンクロナスマーターも空気の力で浮かすという入念きわまりない設計思想。私が搭載していたトーンアームは米国エミネント・テクノロジー製で、SZ・1Tのように空気の力で無接触状態となるリニアトラッキング方式であった。当時はサテリン音響のM21や日本ビクターのMC・L1など、いくつかのMC型フォノカートリッジを使っていた。そのSZ・1Tを売却して、私はワディア2000の購入資金に充てたのだった。それから数年はワディアもたらしめたデジタルオーディオの虜になり、私は至福の日々を過ごしたのであ

る。幸運なことにその頃にはチャンスを得てオーディオ誌に執筆するようになっていた。最初の頃はあるオーディオ誌の編集長から戴いたペンネームを使っていたが、本名とペンネームの違いが煩わしくなって、本名で執筆するように切り替えた。

暗騒音が存在するからこそ
微細な音情報が際立つて
感じ取れるのではないか

あるとき新製品のアナログプレーヤーを聴く機会が訪れ、そこで私は最新のアナログディスク再生の音に直面して大きなショックを受けてしまった。もちろんグルーヴノイズやスクラッチノイズが含まれていたのだが、なんともいえず音が生々しく訴求力に充ち満ちていたのだ……。それを契機に私はアナログディスク再生をリスタートして、現在に至っている。

アナログディスク再生の音とデジタルの音が決定的に違うところは、たとえば無音部分である。デジタルは無音

1960〜70年代に収録された音源は、
その当時のアナログディスクのほうだが、
明らかに音の鮮やかさや浸透度合いで優れている

部分が本当の無音になってしまおうが、アナログディスク再生の場合は、無音部分でもスタイラス(針先)が音溝をトレースしていくグルーヴノイズ(暗騒音)が絶え間なく聴こえてくる。それは決して不快なものではなく、むしろ音の生々しさを積極的に演出するディザ信号のような存在だ。もちろん測定では、そんな暗騒音はS/N比を悪化させる要因のものでもない。しかし、暗騒音が存在するからこそ微細な音情報が発生して感じ取れるのではないかと、私は思っている。

デジタル音源のCDとアナログディスクを比較すると、確かにハイファイリティ(高忠実度)という意味では例外なくCDのほうが優れている。しかし、感情に訴えかける生々しさでは、アナログディスクの音は決して負けてはいない。演出的な、あるいは脚色的な艶やかさをアナログディスクは音に宿しているようで、たとえば女性ヴォーカルは、アナログディスクのほうがエロティックな美音に仕上がっている場合が多い。1本の音溝に情報が刻み込まれているという意味で、音楽的なエネルギーが持続していることもアナログディスクの音の魅力の秘密ではないだろうか。

割合と最近まで、私はどうの昔に製造完了になったヴィンテージ的アナログプレーヤーを使っていた。まあ、それほど古めかしい機種ではないが、ここ何年か使いつづけていたメインのプレーヤーは、中古で入手した日本のファインナルのバルテノン・ジュニアであるし、ほかにも名品といわれた国産のダイレクトドライブ機もいくつか使っていた……。

**アナログディスクは
人類の偉大な文化遺産。
これからもその音をとことん
追求していこうと決めている**

しかし、最近になって私は気持ちを180度切り替え、現在発売されているアナログプレーヤーを使っていくことにした。過去の名品を愛でていくよりも、現代の製品を使ってアナログディスク再生を極めていくことにしたのである。そう考えさせるきっかけとな

ったのは、スバイラル・グループのSG1というアナログターミネーターとの出会いである。SG1のスキルフルな設計に魅了されただけでなく、回転機構の精度の高さが抜群だったの

だ。SG1がもたらした音は驚くほど緻密で圧倒的といえる情報量を備えていた。組み合わせられたグラハムエンジンアライングのファントムB44というワンプoint支持のトーンアームの性能も素晴らしく、私はかつてワディア2000の音を聴いたときのようにガツンと打ちのめされた。残念なことに、現代の最高峰システムといえるべきスバイラル・グループのSG1とファントム



dCSのスカラッティシステムで聴くSACDやCDはデジタルオーディオの美音として特に気に入っているが、アナログディスクは理屈抜きで音が愉しいのでやめられない。古い音源は当時のメディア=アナログディスクで聴くのが最善と思っている私は、LPレコードの音溝から可能な限りの情報量と躍動感を引き出し、現代的な音に仕上げられるべく積極的に挑戦している。気がつけば聴いている時間よりも調整に費やしている時間のほうが長かったりするのだが、出てくる音に使い手が直接的に関与できるのもアナログオーディオのよいところ。(三浦孝仁)

**かつてこの世界から
遠ざかったことのある私は、
いま心からアナログディスク再生を
愛してやまない**

の組合せは、トーンアームのファントムが少量しか組みあげられない状況らしく常に品薄状態である。

今年になって出会ったハンスのT60というターミネーターにも、私は大いに魅了された。マイクロ精機やファインナルのような超重量級ブラッターを装備した製品は、それほど多くはない。ハンスというメーカーは製造を中国で行なっているようだが、その工作精度の高さは過日のマイクロ精機に匹敵するか、それ以上であった。磁石の反発力を応用して軸受に加わる加重を軽減するマグネットサスペンション方式(偶然というべきかスバイラル・グループも同様)にも共感を覚えた私は、同社製ラックを含めてハンスのT60も導入



アンタニテラゴのベース上にスパイラルグループのプレーヤーシステムを設置しているこの場所は、操作性もよく気に入っている。しかし、今後はPCオーディオを研究・実践する目的で、イケオン製オーディオコンピュータ(PC)が鎮座する予定。というわけで、目下ハンスステュークスのラックをもう一台注文中である。PCはT.A.O.C製のラックに格納して、その上段にハンスのメラエシを置くことができれば理想的なのだが、うまくまとまるかどうか。PC用の液晶ディスプレイを奥にセッティングできれば画面が存在する煩わしさが少しは緩和できるかもしれない。(三浦孝仁)



導入間もないハンスステュークのT60システム。現状は使い慣れているオーディオラフト製AC3300トーンアーム(製造完了)を組み合わせて、未使用のSME用アームベースにはSMEの309、もしくはグラムエンジニアリングのファントムがマウント可能な状態。古いAC3300が手放せないのは、交換用アームハイプでオルトフォンのSPUなレヘッドシールド対応ができるから。フォノイコライザーは、アンフィオン3、M.O.N.OとエアーのK1x内蔵の回路を使っている。プリアンプは年内中にエアーのKXRに新調する予定なので、残り時間を惜しむようにK1xのバランス入力MC専用フォノイコライザー回路の音を聴いている。(三浦孝仁)

してしまった。約20kgのプラッターが堂々と回るあたりはなかなか壮観だ。アナログ方式、すなわちオープンリールのテープレコーダーでマスター収録した音源は、CDやSACDなどのデジタルメディアで聴くよりもアナログディスクで聴くほうが好きだ。同じように、デジタル収録された音源はなるべくCDやSACDで聴いている。

特に1960年代から1970年代にかけて収録された古い音源は、その当時にアナログディスク化されたオリジナル盤やそれに準ずるもののほうが、明らかに音の鮮やかさや浸透度合いで優れていると感じる。たとえば、広くオーディオファイルに知られた菅野沖彦氏のレコーディング「ザ・ダイアログ」は、後にSACD化された音と当時のアナログディスクを比べると、保管されていたマスターテープが徐々に劣化してきたのかと思わせるほど、アナログディスクの音が鮮烈で輝きを失っていない。同じように、英国デッカのメタルスタンパーでプレスされた国内プレスのクラシックや、ルディ・ヴァン・ゲルダーの刻印のあるメタルスタン

パーを使ったりバイテ時代のブルーノート盤が、近年リマスターされたCDよりもはるかに魅力的な美音を聴かせてくれることを存じだろるか。CDやSACDといったデジタルオーディオが台頭してから、明らかにアナログディスク関連の製品は減ってしまった。しかし、逆にアナログディスク関連の製品は良くなってきた。それはデジタルオーディオという強力なライバルが出現したからに相違ない。アナログディスクが独占的な状態の頃には気づかなかつた音質向上のファク

ターがいくつも発見されて、最先端のアナログディスク再生の音は実に深々とした情感を身につけただけでなく、音のリアリティに關してもオーディオファイルを大いに魅了してやまない。アナログディスクは、120年を超える人類の大いなる文化遺産である。それに替わるようにデジタルメディアが主流となったのは疑いの余地がない現実であるが、アナログディスクの音の素晴らしさを知ってしまった私は、これからもその音をとことん追求していこうと心に決めている。